Virtual Analog Synthesizer Plug-In

V-STATION

クイックスタートガイド

はじめにお読み下さい

本マニュアルでは、V-Station の機能、および主な使用方法を解説します。各章の記述、および画面は V-Station 1.0 を元にしているため、今後のマイナーバージョンアップによっては画面構成が異なることがありますので予めご了承下さい。仕様変更などは予告なく行われることがあります。

はじめに

　この度は Novation 社のソフトウェアシンセサイザー、V-Station をお買いあげいただきまして、まことにありがとうございます。
この V-Station はバーチャルアナログシンセサイザーとして好評のハードウェアシンセサイザー、K-Station を完全プラグイン化したもので、Macintosh/Windows の両プラットフォームにてお使いいただけます。
この V-Station の心臓部には Novation 社独自の“リキッドアナログ”シンセサイズエンジンを採用し、リッチで高密度なすばらしいサウンドを提供します。ユーザーインターフェースも簡潔にまとめられており、音づくりも楽しむことができます。

主な仕様

・3 基のオーディオオシレーター
・ノイズジェネレーター
・リングモジュレーター
・“リキッドアナログ”ローパスフィルター（レゾナンス付き）
・2 基の ADSR エンベロープジェネレーター
・2 基の MIDI 同期可能な LFO（数種類の波形搭載）
・ポルタメント
・アルペジエイター
・6 基の同時使用可能なマルチエフェクツ
・シーケンスソフトに複数立ち上げ可能（CPU パワーに依存）
・400 のメモリーエリアと 200 種類のファクトリープリセット
・K-Station とサウンドデータのやりとりが可能
※Windows では VST インストゥルメント、Macintosh では VST インストゥルメント/Audio Unit フォーマットに対応します。

Macintosh コンピューターへのインストール

付属の CD をお使いの CD-ROM ドライブに挿入し、マウントされた CD-ROM 内の「Vstation.dmg」をダブルクリックして開いてください。新たにウィンドウが開き、その中にふたつのファイルがあります。「V-Station（バージョン番号）AU.pkg」は AU バージョン、「V-Station（バージョン番号）VST.pkg」は VST バージョンです（どちらも OSX 専用）。

インストールしたいタイプのプラグインをダブルクリックして起動してください。インストールが開始されます。それぞれの画面で「続ける」、または「同意する」のボタンをクリックしてください。インストール先のディスクを指定する画面が表示されたら、任意のディスクを選択してください。お使いの Audio Unit アプリケーションと同じディスクがよいでしょう。その後同様に「続ける」ボタンを押し最後に「インストール」ボタンを押すことでインストールされます。インストールが終了したら「閉じる」ボタンを押して完了です。

次にホストアプリケーションを起動し、V-Station を呼び出してください（ホストアプリケーションの操作に関してはホストアプリケーションのマニュアルをご参照ください）。以下のような画面が表示されますので、User Name にお客様の名前を、Serial Number に英文マニュアルの 1 ページ目に記載されているシリアル番号を入力して UNLOCK ボタンをクリックします。以上でインストールは完了です。

なお、ホストアプリケーションによってはホストアプリケーションの起動中に下記の画面が表示されることがあります。表示された場合は、その時点で名前とシリアル番号の入力を行ってください。

Novation V-Station - Authorisation

Before this plug-in can be used, it must be unlocked by
entering your user name and serial number.

Once unlocked, you will not see this message again.

User Name

Serial Number

Cancel Unlock

Windows コンピューターへのインストール

付属の CD をお使いのコンピューターの CD-ROM ドライブに挿入してください。マイコンピュータからせ CD-ROM を開き、インストーラファイルをダブルクリックして起動してください。

インストーラが起動しますので、「Next」ボタンを押して進んでください。License Agreement のページでは「I accept ～」（同意するの意）を選び、「Next」ボタンを押してください。VST プラグイン（VstPlugins）フォルダーを指定するページでは、お使いの VST アプリケーションで指定してあるフォルダーを選んで「Next」ボタンを押して進んでください。最後に「Install」ボタンを押すことでインストールされます。インストールが終了したら「Finish」ボタンを押して完了です。

次に、VSTi が使用できるホストアプリケーションを起動し、V-Station を呼び出してください（ホストアプリケーションの操作に関してはホストアプリケーションのマニュアルをご参照ください）。以下のような画面が表示されますので、User Name にお客様の名前を、Serial Number に英文マニュアルの 1 ページ目に記載されているシリアル番号を入力して UNLOCK ボタンをクリックします。以上でインストールは完了です。

なお、ホストアプリケーションによってはホストアプリケーションの起動中に下記の画面が表示されることがあります。表示された場合は、その時点で名前とシリアル番号の入力を行ってください。

V-Station を使ってみましょう

アナログシンセや VSTi/Audio Unit プラグインに詳しい方でしたら、すぐに使うことが出きるでしょう。主要パラメーターは全て、MAIN パネルに集約されており、それほど頻繁に使われないパラメーターはサブページにあります。それらのページにジャンプしたいときはウィンドウの右上にあるボタンをクリックしてください。なお CD-ROM 中には詳細な英文取扱説明書（PDF ファイル）が収録されています。
もしアナログシンセに詳しくない方でも、これからのセクションにて各パラメーターをご説明いたしますので、V-Station の各機能をすぐに理解できるでしょう。

メイン（Main）パネル

V-Station のサウンドを決定付ける主要パラメーターが配置されているのが、このパネルです。ここにはオシレーター、5 チャンネルミキサー、フィルター、エンベロープジェネレーター、LFO の各セクションに分かれております。

オシレーター（Oscillator）

アナログシンセでのオシレーターは、ギターでは弦に相当します。つまり基本となるサウンドソースであり、ここの設定で V-Station の基本音色が決定付けられます。
3 基あるオシレーターのそれぞれに数種類の波形が用意されており、さらにそれぞれのオクターブ（oct）、半音（semi）、デチューン（detune）といったパラメーターで音づくりができます。各オシレーターを様々に組み合わせることにより、自由な音づくりを楽しめます。
波形（wave）は 4 種類（正弦波、三角波、方形波、鋸歯状波=のこぎり波）から選択できます。さらにパルス幅のモジュレーション（pwm）を搭載しており、しかも 4 種類全ての波形にかけることができるので音色のバリエーションが驚くほど幅広く得られます。パルス幅はマニュアル（pos）で設定する他、フィルターのエンベロープシェイパー（env）か LFO2（lfo）からのモジュレーションでもコントロールできます。
なおピッチのモジュレーションもフィルターのエンベロープ（mod env）か LFO1（lfo1）で行えます。

ミキサー（Mixer）

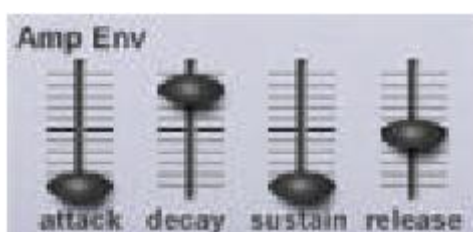
この 5 チャンネルミキサーは各オシレーターの音量バランスを取るために使います。またそれ以外にリングモジュレーター（ring）とノイズジェネレーター（noise）をミックスすることで、特殊な効果も得られます。リングモジュレーターはオシレーター1 と 2 の信号を基につくられ、異なる周波数の信号をつくり出します。例えば不協和な感じや金属的なサウンドを得られます。
ノイズジェネレーターはドラムや効果音などの音程を持たないサウンドをつくる場合に使います。
ソロボタンは各サウンドソースを独立して聴くことができます。つまり、各セッティングを独立して調整したいときに大変便利です。

フィルター（Filter）

V-Station のローパスフィルターは Novation 社の“リキッドアナログ”テクノロジーの心臓部ともいえるもので、「本物」のアナログフィルターの特性を再現しています。このフィルターは自身のエンベロープジェネレーターか、LFO2 で変調可能です。レゾナンス（res）は平坦なサウンドから強力なクセを持ったサウンドまでつくり出し、エッジ感を付加します。オーバードライブ（o-drive）はサウンドを歪ませます。
フィルター特性は 12dB と 24dB の切り替えです。12dB/oct では、日本製のオールドシンセの特性を再現します。また 24dB/oct ではよりパンチのある特性となり、アメリカ製のオールドシンセに近い感じを出せます。

モジュレーションエンベロープ（Mod Env）

幅広いフィルター変調を可能にする、4 ステージのエンベロープジェネレーターです。シンセベースやシンセブラスなど、アタック時の音色変化を出すには必須のパラメーターです。またこれでオシレーターを変調することで、ピッチ変化やパルス幅のモジュレーションを行うことも可能です。

アンプリチュードエンベロープ（Amp Env）

サウンドの “シェイピング”（音の鳴り方=音量変化）を決定する、4 ステージのエンベロープジェネレーターです。ここの設定によりアタックの強いパーッカシブなサウンドや、ゆっくりしたアタックのレガートサウンドなど、幅広い表現ができます。

LFO 1/2

ここには 2 基の LFO が用意されており、ピッチやトーンのモジュレーションをコントロールします。それぞれに数種類の波形が用意されており、様々な効果を得られます。
LFO 1 は主にビブラートなどのピッチ系モジュレーションに用いられ、LFO 2 はフィルターのスイープやパルス幅のモジュレーションに用いられます。
各 LFO のレイト（周波数）は、speed ノブの上にある“LED”の点滅によって表わします。
また各 LFO は独立して、入力される MIDI クロックに同期します。これによりスイープなどの効果をシーケンサーのテンポに同期させることができます。

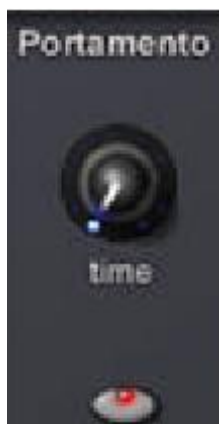
～以下のセクションは、全てのページに表示されます。

マスターセクション

ここでは“LCD”（ディスプレイ）の右側にある program アップ/ダウンボタンを使って、プログラム（音色）を選択できます。200 種類ものプリセットサウンドがあるので、このボタンを使って各サウンドを聴いていただければ、V-Station の機能を理解する近道といえます。いずれのサウンドもエディットをしてセーブすることも可能なので、オリジナル音色をつくりたいときに、その元となるプログラムからスタートするのも良いでしょう。またこのセクションには、マスターボリューム（volume）も調整できます。
このセクションの下部にあるのが、何ボイス使われているかを表わすメーターがあります。また MIDI 信号の受信時に点灯するインジケーターも、ここにあります。

アルペジエイター（Arpeggiator）

V-Station のアルペジエイター機能は複雑なシーケンスをつくるうえで、キーとなるファンクションです。テンポはシーケンサーに同期することが可能（もしくは敢えて同期させず）で、いくつかのパターン（pattern）を選択できます。また最大 4 オクターブ（octaves）までの範囲を設定可能です。
プログラムによってアルペジエイターの設定もいろいろなものがあり、組み合わせによって面白いリズムパターンをつくることができます。

ポルタメント（Portamento）

このノブ（time）を調節することにより、各ノート（音程）間をなめらかに変化させることができ、Roland TB-303 の"Slide"ファンクションを再現したり、ビンテージシンセのニュアンスを再現したりできます。
なおこの機能は、モノフォニックでもポリフォニックでも動作します。

エフェクツ（Effects）

ホストアプリケーションでV-Stationにエフェクトをかけることも簡単ですが、V-Station自身でもマルチタイプのエフェクトを付加できます。
ディレイ/エコー(delay)、リバーブ(reverb)、コーラス/フランジャー/フェイザー(chorus)、ディストーション（distortion)、イコライザー（eq)、オートパン（panning）の幅広い効果を得られるエフェクトを装備し、しかもそれぞれを同時に使うこともできます。
また必要に応じてエフェクトは、MIDIクロックに同期させることも可能です。
もちろん例として、各プログラムにはそれぞれに複数のエフェクトを設定していますが、CPUパワーを必要とすることを憶えておいてください。もしCPUパワーの不足を感じたら（音切れなど)、いくつかのエフェクトをボタン（on/off）を使ってオフにしてみてください。

プログラムの選び方

V-Stationには400ものプログラムメモリーを搭載し、そのうちはじめの200にはファクトリープリセットを内蔵しています。単純にprogramアップ/ダウンボタンをクリックすることで、それらのプログラムを選択し聴くことができます。これによりV-Stationのサウンドのすばらしさをすぐにご理解いただけるでしょう。ベースサウンド、パッド、アルペジオ、その他の劇的に変化するサウンドなど、その幅広い表現力に驚くことでしょう。もちろんご自身の好みに応じてエディットして、オリジナルプログラムとしてセーブすることができます。

プログラムのセーブ

エディットしたサウンドが気に入って、今後も使いたい場合もあるでしょう。そのようなときには、“LCD”下の write ボタンをクリックしてください。ディスプレイにセーブ先のメモリー番号が表示されます。上書きして良い場合は confirm ボタンをクリックしてください。現在のメモリーにセーブされます。

別のメモリーにセーブしたい場合には（つまり元のプログラムはそのまま）、program アップ/ダウンボタンでセーブ先のプログラムを選び write ボタンを再度クリックしてください。

バンクのロードとセーブ

ほとんどのシーケンサー（ハード/ソフトとも）では、シンセサイザーのサウンドバンクをロードしたり、セーブしたりできます。この機能はオリジナルのサウンドライブラリーをつくりたい場合に便利で、例えばテクノ系サウンドをまとめたい場合に、バンクに“Techno”と名前を付けてセーブすることができます。他にもビンテージサウンドをまとめて、“Vintage”などと名前を付けて保存するのも良いでしょう。全てのサウンドをバンク単位で V-Station へロードできます。つまりこの機能を使えば、個人の V-Station サウンドライブラリーを構築できるわけです。またこのバンクは、インターネット上からダウンロードして、V-Station へロードするといったことも可能になります。
バンクのロード/セーブに関しては、それぞれのシーケンサーの取扱説明書をご参照ください。

注意：今回サウンドの一まとまりを「バンク」と呼んでいますが、シーケンサーによっては別の名称を使っている場合があります。ご注意ください。

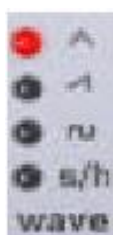
ロード/セーブの一般的な注意事項

シーケンサーとの間でロード/セーブを行う場合には、一般的に 3 つの方法があります。
まず 1 つ目はソングをセーブすることです。この場合は演奏情報だけではなく、V-Station の現在のセッティングもセーブできます。つまりソングをロードすれば、同時に V-Station のサウンドもリコールされるわけです。もしエディット中のサウンドでも、ソングが再び読み込まれたときにリコールされます。
2 つ目はそれぞれのサウンドを V-Station のメモリーにサウンド（プログラム）をセーブする方法です。この方法であれば V-Station をソングとは切り離して（つまりいずれのソング

でも）使用でき、エディットしたり新規につくったサウンドもリコールして使えます。
しかしオリジナルのサウンドが膨大な量になってしまった場合には、バンクとしてセーブするのが最も良い方法でしょう。この方法であれば、ソングとは切り離してサウンドをV-Station へロードできます。異なるバンクをそれぞれ V-Station にロードすることで、400種類のプログラムを聴くことができるようになります。
ややわかりにくいかも知れませんが、ほとんどの場合に V-Station のサウンドを必要に応じてソング中に簡単に取り込むことができ、シーケンスデータごとソングとしてセーブできるはずです。一旦セーブしたソングを再びロードすることにより、V-Station サウンドも呼び出されるわけです。WRITE や SAVE BANK 機能により、ご自身のサウンドライブラリーの作成が便利になるでしょう。

サウンドのエディット

V-Station の各パネルは K-Station の実際のパネルとほぼ同じに操作できます。単純にエディットしたいノブやスライダーにマウスのポインターを置くだけで、パラメーターが選択され、LCD にそのパラメーター名とバリュー（数値）が表示されます。

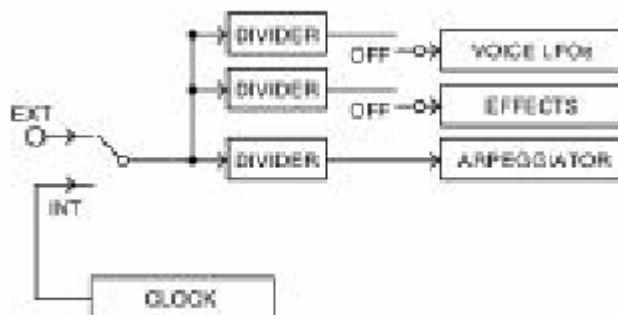
エディットしたいノブやスライダーをクリックし、上下に動かしてください（ドラッグといいます)。ノブなどが動き、LCD のバリューが変化します。

スイッチの場合はそれらの上でマウスクリックすることで、それらをオン/オフします。またオシレーターやLFO の Wave などいくつかのパラメーターの場合、それぞれの LED をクリックすることで選択できます。

以下に示すパラメーターの場合はドロップダウンメニューになっており、バリューをクリックすることでいくつかの候補が表示されます。その中から設定したいものを選び、マウスボタンを放すことで設定完了です。

お使いのマウスにホイールが付いているものなら、それを使うことでより効率良く設定できます。ノブやスライダー上にカーソルを置きホイールを動かせば、クリックなしで設定

が可能です。同様に、ホイールはドロップダウンメニューでも有効です。

MIDI クロックとの同期について

初期設定では V-Station はシーケンサーのテンポに同期するようになっており、アルペジエイターもこの外部クロックに同期します。つまりアルペジエイターをオンにすれば（あるいはアルペジエイターがオンになっているサウンドを選べば）、現在のソングに自動的に同期します。もちろんソングのテンポの何倍か（半分や 2 倍など）で動作させることも可能です。GLOBAL ページで外部同期を解除（INTERNAL に変更）すれば、ソングのテンポとは無関係に EXTRA ページにあるアルペジエイターの TEMPO 設定にて動作します。
さらにエフェクトや LFO もソングのテンポ、またはアルペジエイターに同期できます。この場合は、SYNC RATE を任意の設定（16th や 8th など）にすることで同期します。もし LFO の SYNC パラメーター、またはエフェクトの同期設定が OFF になっていれば、それぞれの独自の設定（モジュレーションスピードやディレイタイム）で動作します。
GLOBAL ページで同期設定が INTERNAL でエフェクトや LFO が同期する設定の場合、外部クロックではなくアルペジエイターのクロックに同期します。下図にクロック接続の概念を示します。

もちろんそれぞれの LFO で独自の設定が可能なので、特定のエフェクトや LFO のみ外部同期させたりすることもできます。

その他のページ

V-Station のほとんどの機能が MAIN パネルに集約されていますが、それほど使わない設定などは他のページでできるようになっています。ウィンドウの右上から、各パネルを選択できます。

単純にボタンをクリックすることでパネルが切り替わります。以下にそれぞれのページの説明をします。

エクストラ（EXTRA）ページ

ここにはオシレーター、LFO、エンベロープ、そしてアルペジエイターに関して、あまり頻繁に使われないパラメーターをまとめてあります。
詳細は付属 CD-ROM 内に英文 PDF ファイルとして収録されています。各パラメーターの日本語説明については、今後弊社ホームページの Novation サポートページにアップされる予定ですので、そちらをご参照ください。

コントロール（CONTROL）ページ

ここではピッチベンド、モジュレーションホイール、アフタータッチなどのコントローラーに関する設定ができるようになっています。
詳細は付属 CD-ROM 内に英文 PDF ファイルとして収録されています。各パラメーターの日本語説明については、今後弊社ホームページの Novation サポートページにアップされる予定ですので、そちらをご参照ください。

グローバル（GLOBAL）ページ

ここでは V-Station 全体に関わるパラメーター（全体のピッチ設定 = master tuning、クロックの同期元、ベロシティーのカーブなど）を設定できます。またファクトリープリセットを復活させたり、ハードウェアシンセの K-Station とサウンドのやりとりをしたりといったこともこのページで行えます。
詳細は付属 CD-ROM 内に英文 PDF ファイルとして収録されています。

おしまいに

V-Station は非常に多くの可能性を持っております。それらの詳しくは技術的なものも含めて、付属の CD-ROM 内に PDF フォーマットの英文マニュアルとして説明されています。しかしながら基本的なことはメインパネルに集約されていますので、どんどん触って、実際に音づくりを楽しんでください。それぞれのパラメーターがどういった働きをするかを理解することができるでしょう。また豊富なファクトリープリセットの各パラメーターが、どの様な設定になっているかを解析してみるのも良い方法です。
ぜひ V-Station をあなたの DAW 環境でご活用ください。